『証し　2』　　2023年05月01日

最相葉月氏の『日本のキリスト者　証し』は、単行本で千頁を超える大部の本なので、読み終えるのに数日かかった。そして、135人のキリスト者の「証し」の証言に圧倒された。まず、日本にはカトリック、正教会、聖公会、プロテスタント諸教派、そして、在日の韓国人、ブラジル人教会なども多々あり、その幅広い多様性を知らされた。教会の多様な働きによって、キリスト者が生まれ、キリストの恵みが大胆に証しされている。キリスト者になる人は精神的に純真なところがあり、人間を超えた方を受け止める感性を持った人が多いと思った。生まれながらのキリスト者は特にそのようだ。そして、聖書のみ言葉に素直に聞き入っている。「あなたがたを襲った試練で、世の常でないものはありません。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えてくださいます。（Ｉコリント10：13）」のみ言葉に立たせられた人が多い。それは、生きる上で、人は皆、耐え難い苦難に遭遇しているということである。親しい人との死別、病気、貧困、理不尽な扱い、行き詰まりなどの苦境から、神、主イエス、マリアにすがって、自分の生を獲得していく姿は感動的である。その自己獲得は一筋縄ではない。迷いや疑い、挫折を繰り返しながら、思わぬところで神と、また人と出会っていく。自分の罪との葛藤の中から「赦し」を見出し、救いに与る姿には安堵する。私も、自分の信仰生活と重ね合わせながら読んだ。証言者たちは皆、個性的で、読む者に感動を与えてくれる。自分の信仰を捉え直す機会を与えてくれるので、一読をお勧めしたい。興味深い「証し」を少し紹介したい。

カトリック信者になった大川昇氏は、洗礼を受ける前にご聖体（聖餐）を受けたが、それを、神父に「ローマ法王を騙して、ご聖体ってのを盗んで食べました」と告白した。神父から「赦されます」と言われ、洗礼を受けて紹介された時、「この人はね、キリストを盗んで、キリストに逮捕された人なんですよ」と言われたとのこと。ご聖体（聖餐）は受洗者のみが受けられるという決まりを破り、盗み食いしたという笑い話である。ご聖体（聖餐）は受洗者が与れるという決まりに対し、受洗者しか与れないのかと盛んに議論されている。教会に行ってない人から、2千年経って、そんな根本的な議論が起こるのは、教会は生きていることだねと言われたことがある。私は、その決まりは人間が作ったもので、キリストの望むところではないと思っている。

聖公会の執事になった太田信三氏は「会社では、同期の中でいかに出世するか、もう殺し合いみたいな世界です。でも、ぼくは殺す側ではなく、殺されていく側に立ちたい」という思いからキリスト者を目指した人である。急速に伸びた企業は、どの企業も社員を猛烈に働かせる。太田氏も猛烈社員であることを強制され、うつ病になった。その中で、殺される側に立つという思いになっていった。キリスト者は、イエス・キリストの生き方から、時代の価値観に抗う人が多いのは当然であろう。キリスト教は時代に迎合するのではなく、社会的に弱者の立場に追いやられている人に関心を寄せる宗教である。私も、世の多数派、体制派に与したことはなく、常に少数派に立っていたように思う。

晴佐久昌英氏はカトリック教会の司祭である。彼がある教会に赴任した時、前任の神父から、「この教会は死んでいるよ。ここじゃ、いくらきみでも洗礼を授けるのは難しいよ。場所も悪いし、信者はみんな頑固だし、死んだ教会だよ、ここは」と言われたそうである。神父の言葉に耳を疑ったが、燃えて、宣教に励んだそうである。すると、次の年には84人に洗礼を授けたと言う。死んでいると見える教会でも、キリストの霊は現臨していたとい

うことであろう。私は尊敬する牧師から、どんな教会であれ、キリストが建て、キリストの愛が息づいている教会であるから、心を込めて奉仕しなさいと言われた。使徒信条で告白する「聖なる公同の教会を信ず」は、この信仰ではないかと思っている。

日本基督教団の信徒の谷口ひとみ氏は「キリスト教会はものすごく父権性の強い社会です。構造的に女性差別を内包している。聖書の中で女性は員数外です」と書き出し、「キリスト教は愛の宗教といわれるかもしれないけど、そんなものじゃない。本当にしんどい女性たちが自分のつらさをいえない。教会はそれを温存してきた」と言っている。そして、教会における女性差別の様々な実態を上げている。聖書は、男性中心の文化の中で書かれた。その聖書を正典とする教会は、女性を軽視したことは確かである。ＬＧＢＴＱ（性的少数者）に対しても、保守的で開かれてない教会も多々ある。谷口氏が指摘するように、聖書を一字一句間違いのない「逐語霊感説」に立って読むことから、歴史的、批判的に読むことを当然としなければ、社会に責任を負う教会になれないことを知るべきである。

中山弥弘氏は12歳の時、ハンセン病者として、鹿屋市の国立療養所に入所した。仏教やキリスト教に関する本を読んでいる時「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣け」という言葉に引っかかり、聖書を懸命に読み始めた。家族からは捨てられ、足が悪くなって切断したり、目もだんだん見えなくなり、その孤独と苦悩は計りしれない。15歳年上の女性と結婚し、愛と平安を得る。中山氏は晩年「私は、ハンセン病になってよかった。ハンセン病になったからこそ神に出会い、キリスト教徒になった。この病にならなければ出会いませんでした」、また、「キリスト教を信じたからこそパウロがいうように、私はすべてを失いましたが、それらを塵あくたと同じだと思えるようになったのです」と言っている。更に、乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子は蝮の巣に手を入れると書かれているように、獣と幼児が共に生きている世界、すべてのものが相和して生活できるところに復活する。これを信じる以外にないと言い切る。今を喜び、復活の希望に生きている信仰には敬服する。

著者最相氏が「あとがき」で、無教会の荒井克浩氏の贖罪信仰との決別説教について興味深い記述をしておられるので、紹介したい。イエスは私たちの罪を償うために十字架に掛けられ殺された、その死によって罪が赦された、つまり、イエスの十字架の死は贖罪の死であると教えられてきた。キリスト教の要ともいえる教理である。しかし、十字架の死は贖いの死ではなく、イエスの死は神のみ旨を歩んだ結果、殺害された死である。パウロも贖いとは書いていない。十字架には栄光はなく、イエスは、「わが神、わが神、なぜ、私をお見捨てになったのですか」と叫び、絶命した。これは、神を信じられなくなった者の叫びで、イエスは不信仰者になって死んだ。「イエスは弱かったのである。敗者である。しかし神はその弱さに立たれたのである。イエスの十字架の死はどうしようもなく弱いことの証明であったが、その愛なる生き方ゆえにその弱さに『然り』を与えたのである。」そして、「私の『神が罪となる』というとらえ方は、私の実存に喰い込んでいるものであり、これは贖罪ではないのです。神はひたすら人間と同じ罪人になる、そこにおいて神が罪人である人間を受け入れる、というものです。そこにおいてしか、人間存在の根本からの救いはないと信じています」と述べている。著者最相氏はキリスト者ではないが、聖書を読み、大勢のキリスト者と出会い、膨大なキリスト教文献を読んで、荒井氏の信仰理解に違和感なく、共感を覚えると書いている。私はパウロの「神の約束はすべて、この方（主イエス）において『然り』となったのです（Ⅱコリント１：20a）」の言葉から、主イエスの十字架と復活に神からの「是認」の救いをいただいたと信じている。